

単純な人は不幸なのか？

—認知的複雑性が幸福感に与える影響—

1721021 伊藤公平

Key words: 認知的複雑性, 主観的幸福感, 協調的幸福感

目的

認知的複雑性とは、対人認知の際にどれほど他者を複雑に捉えることができるかの程度を示し、認知的複雑性が高い場合は、他者を多角的に捉えることが知られている。

本研究では認知的複雑性と幸福感の関係について検討した。なお、本研究においては、幸福感を自己の内的な感情である主観的幸福感と他者との関係に左右される協調的幸福感の二つに分類して測定する。認知的複雑性と幸福感の関係について、自己の幸福と他者との関係によって生じる幸福に着目した検討を行うことが目的である。

方法

手続き 調査参加者は大分大学の学生 153 名 (男性 91 名, 女性 61 名, 未回答 1 名) であった。調査は講義中に Web 調査を用いて参加を求めた。調査参加者は個人属性、Rep テスト (role construct repertory test; Kelly, 1955)、主観的幸福感 (伊藤他, 2003) のうちの 9 項目、協調的幸福感 (Hitokoto & Uchida 2014) の 9 項目、許し尺度 (加藤・谷口, 2009) のうち寛容さ因子 10 項目について回答を求めた。

認定的複雑性得点 Rep テストは 100 項目回答する必要があり、参加者に重い負担となる可能性がある。そのため、項目数を削減するための予備調査を行った結果、50 項目回答することで十分に高い相関係数 (.90) が認められたため削減版を使用している。

結果

尺度の分析 許し尺度 ($\alpha=.85$) 及び協調的幸福感 ($\alpha=.80$) については、先行研究と同様に十分な信頼性が認められたが、主観的幸福感については、十分な信頼性が認められなかったため、最尤法プロマックス回転を用いた繰り返しの因子分析により、自信 ($\alpha=.79$) と人生満足度 ($\alpha=.67$) の 2 因子を抽出した。それぞれ、平均値で尺度得点を算出している。

尺度得点の性差比較 それぞれの尺度得点の性差について対応のない *t* 検定を用いて検討したところ、

認知的複雑性及びすべての尺度得点において性差は認められなかった。次に、それぞれの尺度得点同士の男女別の相関係数について Table 1 に示す。それぞれの相関係数を確認したところ、人生満足度と協調的幸福感及び自信の相関は男女ともに有意な相関が認められた。男女で異なるパターンを示した部分に着目したところ、女性は協調的幸福感と許しの間に正の相関が認められる一方で男性は自信との間に正の相関が認められた。また、男性においては認知的複雑性と他の尺度得点との相関は認められなかったが、女性の場合には、認知的幸福感と人生満足度の間に負の相関が認められた。

Table 1 尺度得点の相関係数 (右上男性、左下女性)

	1	2	3	4	5
1 認知的複雑性	1.0	-.17 *	.04	-.17	-.07
2 協調的幸福感	-.22 *	1.0	.14	.65 **	.53 **
3 許し	-.18	.33 **	1.0	.33 **	.36 **
4 人生満足度	-.30 *	.43 **	.31 *	1.0	.44 **
5 自信	-.21	.23 *	.16	.40 **	1.0

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考察

本研究では幸福感と認知的複雑性の関係について検討した。尺度間の相関を男女別に確認したところ、男女ともに認知的複雑性と幸福感の間には正の相関は認められなかった。この結果は、「正しい」対人認知を行えることが必ずしも幸福感に結びつかないことを示す。特に、女性の場合には認知的複雑性と人生満足度の間には有意な負の相関が認められている。協調的幸福感と許しとの間に正の相関が認められたことから、他者のネガティブな側面を受容することで協調的幸福感は高まるが、そのことが主観的な幸福感に負の影響を与えている可能性が示唆される。本研究は横断調査のため因果関係について検討が困難である。そのため今後のさらなる調査で因果関係を明らかにする必要がある。

引用文献

Kelly, G.A. (1955) The psychology of personal constructs. New York: Norton.